

令和7年度 福井県立若狭高等学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
教育課程・学習支援	①生徒の生活実態や学習状況を把握し、計画的・継続的な学習ができるよう指導する。	学習時間1時間未満の生徒は減少したが、1～2時間が最多であり、さらなる学習時間の確保が課題である。調査前に計画的に取り組む生徒は増加しており、教員の計画的な働きかけの成果が見られる。	個別面談等を通して学習状況を把握し、進路意識の向上とあわせて学習への意識付けを行う。学習ガイダンスや課題設定を工夫し、学年・各部署と連携して学習習慣の定着を図る。
	②公開授業や教科会などで研修・研究を充実させ、生徒が主体的に学べる授業実践に努め、授業力向上を目指す。	互見授業や授業研究会を実施し、主体的な学びを促す授業改善を進めた。その結果、9割以上の生徒が学びを深められたと評価している。	互見授業は活発化しているので、自由に見合える環境づくりに取り組む。学力向上チームは、目的と取組を明確にする必要あり。指導法の検討や悩みの相談等、日々の教科会でやっている活動を活性化するため、チーム内でテーマを持ち、計画・取り組み・振り返りのサイクルを回していく。教科会全体としても学習ガイダンスの作成、授業アンケートや模試の分析等に取り組み、生徒の実態把握や教科内での共通理解を深めながら、授業力向上を目指す環境としたい。
地域住民との連携	①PTA総会、各委員会活動、同窓会総会などの場で積極的な広報を心がけ意見交換の充実に努める。	PTA活動および保護者懇談会はいずれも高い満足度を維持している。一方で、PTA総会の参加率は低く、参加促進が課題である。	各委員会との連携を強化し、役員以外も参加しやすい機会を設けることで、参加率向上と情報共有の充実に図る。
図書・情報等の管理と発信	①ICT環境の強化を図り、授業のDXを目指す。	多くの教員がICTを活用した授業を実践し、一定の成果が見られたが、毎日活用には至っておらず、活用の差が課題である。	活用が進んでいない教員への支援を行い、授業改善につながるICT活用を段階的に推進する。
	②読書案内や新刊図書の情報発信を充実させ、図書室の利用者数増加を図る。	80%以上が読みたい本が充実しているとおむね充実していると回答し、図書室を利用した生徒数も80%を占めるが、利用していないと回答した生徒が20%ほどいた。 図書からの情報に目を通した生徒数は、昨年より少し減少した。過去と比べると年々見ていない生徒が増えている傾向にある。	図書委員会と連携して、読みたい本が充実していないと考えている理由を更に探り、より充実した図書室を目指したい。 DXに伴いクラスルームでの連絡配信を増やした結果、全体的に資料配信に気が付かない生徒が多くなっている。図書委員や担任の先生から呼びかけていただけるよう仕組みを作っていく。
生徒のキャリアサポート	①生徒が自分の将来や生き方、職業や地域について考える機会を増やし「自分のやりたいこと」を見つけることができるような進路支援を行う。	教員間で進路支援の方針が共有され、生徒・保護者ともに高い満足度を維持している。	教員間および保護者との情報共有を強化し、全校体制で進路支援の充実に図る。
	②各種試験の分析を生徒、教科担当それぞれ行い、今後の対策を検討し、実行する。教科担当者と担任間で情報を共有し、全校体制での進路支援を行う。	模試分析を行い、「大いに役立てることができた」と回答した教員は昨年度18%から52%と飛躍的に上昇した。強制的に分析結果や対策を文章で回答してもらった形をとってしまったが、意識は向上したのではないかと。生徒の模試等の見直しは昨年度79%から81%と微増した。90%を目指し対策を練りたい。生徒の進路志望や模試成績を把握している保護者は昨年度比-7%の86%。改善策が必要。	模試等の分析が個人で終わらず教科・科目単位で実施できるよう教科会での有効活用をお願いする。デジタルでの分析をできない教員を減らす。教員が模試分析や対策をする数値の上昇はみられたが、これが生徒の成績にどう影響しているのか考察したい。教科担当者会議は継続して行うが、実施方法・内容の見直しの検討が必要。生徒、保護者、双方が成績を把握し、分析して対策をとることができるよう導いていく。
生徒支援	①多様性の大切さを理解させることに努め、思いやりや助け合いの精神、実践力を育成する。	多くの生徒が思いやりある行動を意識して生活しており、教育活動の成果が見られる。一部で不適切な言動があり、継続した指導が必要である。	教育目標を踏まえた指導を日常的に行い、SNSの適切な利用や人間関係形成について継続的に指導する。
	②8時20分までに教室に入ることを奨励し、5分前行動を習慣づける。	不注意による遅刻がゼロの生徒が、94%となり、当初の目標を達成することができた。時間を意識した行動を心がけられている生徒が多い。ただ、不注意による遅刻が多数ある生徒が数名いる。遅刻はしないもののギリギリで登校してくる生徒もみられるのでこれらの生徒を減らしていくことも課題である。	今年度同様、生徒支援部での遅刻生徒への対応や定期的な登校指導を通じての指導を継続していきたい。また、多数の遅刻がある生徒には個々の理由があるとは考えられるが、先を見通した行動ができるように生徒個人に合わせた指導が必要だと考えられる。遅刻が多い生徒には学年会や他部署と協力しながら時間を守る意識や生活習慣の改善をさせていきたい。
	③生徒会活動・部活動・ボランティア活動の推進と充実に努める。	十分意識できた生徒、おむね意識出来た生徒を合わせて、生徒会活動は82.6%、部活動は84.3%、ボランティア活動は53.4%という結果であった。生徒会活動と部活動はおおむね目標を達成することができたが、ボランティア活動は当初の目標を大きく下回った。一度もボランティア活動に参加していない生徒が20.9%おり、これらの生徒が興味を持てるような取り組みが必要だと考えられる。また、目標数値の再考も必要である。	部活に所属している生徒は、ほとんどの生徒が達成感を感じることができているため各顧問を中心に魅力的な活動を継続してほしい。生徒会活動については、生徒会執行部を中心に各学年の役割を意識した学校行事や委員会活動ができるように企画していく必要がある。その中で一人一人がどこかで輝ける瞬間を作れるようにしたい。ボランティア活動は、忙しい学校生活の中でも手軽に参加して奉仕の心を育てられるような企画を生徒に紹介していく。

探究的な学習	①教科「探究」に関する授業力の向上を図るため、各科目内の授業担当者が定期的に打ち合わせを行い、授業のあり方について研究を深める。	各教科および学校設定教科「探究」の授業担当者による打合せや情報共有を通して、授業に探究的な学びの視点を取り入れる取組を進めた。その結果、教員アンケートでは「十分できた」「おおむねできた」と回答した教員の割合が 87.5% (R7)となり、多くの教員が探究的な学びを意識した授業づくりを行っていることが確認できた。生徒アンケートでは「探究的な学びを通して主体的に学ぶ力が身に付いた」と回答した生徒が 94.4%(十分50.1%、おおむね44.3%) に達し、授業改善の取組が生徒の主体的な学びの形成につながっていることがうかがえる。教員アンケートでは 12.5% の教員が「あまりできなかった」と回答しており、探究的な学びの授業づくりについて教員間で実践の差が見られる。生徒アンケートでも約 5.6% が十分に力が身に付いたと感じていないことから、探究的な学びをすべての授業で効果的に実践するための授業研究や共有のさらなる充実が課題である。	今後は、各教科および「探究」の授業担当者による定期的な打合せをさらに充実させ、授業実践の共有や授業改善の視点の整理を進める。具体的には、探究的な学びの視点を取り入れた授業実践事例や指導方法を共有するとともに、生徒アンケートや質問紙調査の結果をもとに授業の改善点を検討する。また、教科横断的な授業研究や校内研修を通して、問いの設定や探究的な活動の取り入れ方などの指導方法を共有し、教員間の授業力の向上を図ることで、すべての授業において探究的な学びの視点を取り入れた授業づくりを一層推進する。
保健管理・教育相談	①検診結果をもとに自己の健康状態を把握させ、日常的に生徒自ら健康管理ができるように努める。 ②時間いっぱい清掃に取り組ませるとともに、教室や身の回りの整理整頓、ごみの分別など環境整備に努める。 ③担任・学年主任ならびに保護者との連携を密にして、生徒と面談する機会を多くもつことに努める。	87%の生徒が自己の健康管理を行っていると考えており(昨年85%)、日頃の指導が成果として現れている。新型コロナ、インフルエンザ等の感染症拡大防止対策の日常の指導を継続して行う。感染症予防の定着を行い、今後も手洗いや咳エチケットなど日常化できるよう指導を行う。虫歯未処置の割合がまだ高いため、治療率をさらに上げることが今後の課題である。 時間いっぱいに取り組めたと感じている生徒の割合は昨年と同様高く97%となった(昨年97%)。教員から見た評価は上昇(98%→97%)。生徒の自己評価とともに教員の評価も高い結果であった。引き続き指導していく必要がある。 97%の生徒が面談で話を聞いてもらえたと感じている。面談回数については、4回以上の面談回数を行うことができた教員は、98%と昨年度に比べ大幅にアップした。(昨年度60%)。引き続ききめ細やかな生徒とのコミュニケーションが必要である。教育相談室の役割が定着し、不登校傾向の生徒の居場所として大きな意義を示した。	現在行っている健康に関する自己管理能力の更なる充実と、生徒保健委員会を活用した保健LTの内容の充実を図る。歯の治療率が向上する働きかけを継続し、その方策を更に検討していく。 担任及び各清掃場所担当者との連携の下、清掃活動に確実に取組ませる。美化委員会の活動をはじめ、生徒が主体的に行動できるように指導する。10分間の清掃時間に集中して取組めるように、効率よい掃除の手立てを検討し、美化意識を高める指導をする。 相談室登校や複雑化した案件対応が増加する中、教育相談体制の更なる充実の必要性がある。SCやSSW、病院等の外部関係機関などの専門家との連携を深める。通級指導も含めた学校教育相談担当者や特別支援コーディネーターのコーディネート力を向上させる。
学年会	①担任が方針を明確にし、生徒が協働して活動できる学習環境を整える。 ②キャリア実現に向け、3年間を見据えた計画・実施・再検討を各学年団で共有する ③日頃の保護者連絡および保護者会での情報共有を密にし、地域や保護者へ教育内容を分かりやすく提示する。	生徒が協働して活動できるLTを実施できた担任が100%と全担任が学年目標をもとに学級経営方針を明確にし、生徒たちが自分たちで考え行動する場を設定することができた。 進路支援については、個人面談やCSCの企画・進路研修会の機会が多いことが影響し、90%以上の生徒が満足している傾向がある。家庭学習や提出物の回答を総合してみると、二極化が進んでいることが伺える。昨年度より、2～3時間以上の家庭学習が定着している生徒や模試の振り返りに取り組む生徒の割合が増えている一方、提出物の提出率が3割以下の生徒や計画的に学習できない生徒の割合も昨年より増えている。今後、高校での学習が定着していない生徒への手立てが必要になると考えられる。 保護者対象研修会、発信等を定期的の実施した。担任との懇談における情報共有と意見交換の満足度において92%の保護者が「満足」「おおむね満足」と回答しており、昨年度並であった。進路情報の満足度については、CSCからの質問であるため、学年団として正確に分析することは難しいが、85%の満足度であるため懇談会自体の満足度よりは低い傾向がある。	生徒が協働して活動できるLTを各部署と協力しながら設定し、円滑なクラス経営の一助としていく。対話などの活動を積極的に取り入れ、他者とのかわりや交流の機会を増やし、対人スキルの向上を目指していく。 引き続き個人面談を含め、丁寧な支援を続けていきたい。また、各部署・各学科と各学年会が連携し、3年間の見通しをもったキャリア発達・キャリア形成のストーリーを描くとともに、生徒のキャリア実現の支援に努めたい。教務部やCSCと連携して、機会ごとに学習計画を立てて、自主的に学習が進められるよう支援する。特に、高校での学習が定着していない生徒、学習についていけない生徒への手立てを考える必要がある。 庶務部やCSCと連携し、PTAや地域の方から、どのような情報を、いつ、どのような形で得たいのか知り、意見交換をすることで、的確に情報を提供していく必要がある。また、保護者懇談会にて保護者の意見や思いを丁寧に聞くことで、学校と保護者との信頼関係の構築に努めたい。